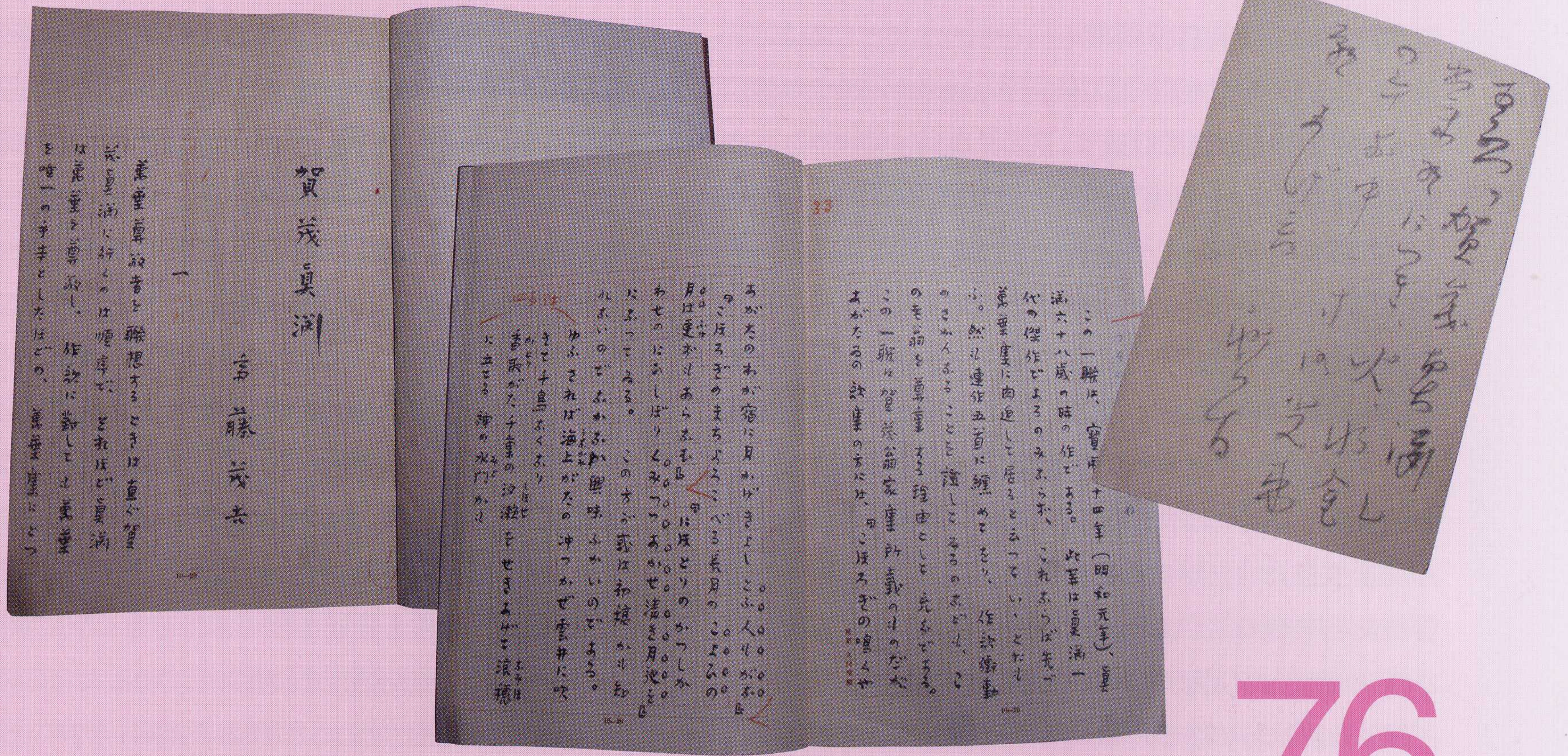


Quarterly report



斎藤茂吉原稿「賀茂真淵」と葉書

No. 76

目次

- ◆2 私の書誌学事始め 高山 節也
- ◆3 ブルガリアーセルビアの国境を越えて 菅原 淳子
- ◆4 「かなし」いのは誰か。 五月女 肇志
- ◆5 外国人としての私が出会った日本文学 呉 英元
- ◆6 〈思い出の一冊〉巴金の『真話集』(真実を語る)
久保田 美年子
- ◆7 『水滸伝』を読んでみませんか 阿部 晋一郎
- ◆8 3月の開館日・開館時間案内
企画展案内

季報

二松学舎大学附属図書館

東アジア学術総合研究所 教授 高山 節也

このたび図書館から原稿依頼されたのを機に、私にとって最も初期の漢籍目録編纂時代をふりかえってみようと思う。初心忘るべからずとの気持ちもあるが、三十年近い書誌学との関わりを思い返す、ノスタルジーのようなものも心底にはありそうである。

私が院生生活を終えて佐賀大学教育学部に奉職したのは昭和五十四年であった。その二年後、文化庁の助成による武雄鍋島家の歴史資料の整理事業が開始され、五十七年には書籍資料の整理が始まった。その活動に参加の機会が与えられたのであるが、その事情はおおよそ書誌学とは無関係なものであった。当時佐賀大学ではある事件に絡んで学生自治会と学校とが対立関係にあった。私は学生委員に名を連ねていた関係で、徹夜の大衆団交にかり出され、一夜あけて朦朧たる頭で研究室に戻った。そのとき所属する国語科の主任から武雄の資料整理への参加を打診され、そのまま現地へ出張することとなった。

当時佐賀大学には中国関係の担当としては、中国語のT教授と私の二名しかおらず、漢籍整理担当者として私が選ばれたのであるが、団交直後朦朧として学内にいるよりは大学から離れた方が良いとの、主任の配慮もあったと聞く。ありがたいことではあったが、実際に漢籍の山を見たとなん、途方に暮れる思いがまず脳裏をかすめた。そこには埃と虫の糞にまみれ、水害のため板状となったものもまじえた、古紙のような和本の堆積があった。

ただよく見てみると、ばらばらに積んである和本のなかに、組み合わせて一部の書籍を形成するものが多量にあるため、まず一点何冊という本来の形に直す作業から入るべきことが判明した。畳敷きの広間の半分近い面積に、一冊ずつ並べた上でお連れを探し、組み合わせを造っていった。徐々に組み合わせが完成していく過程で、なにか混沌としたものが整理され、秩序づけられていく快感が私をとらえ始めた。私自身の内にある整理癖のようなものがあって、それが刺激されたにちがいない。そうなるにつぎは分類である。

院生時代に資料探しの必要から、東大の漢籍目録などを見る機会があったため、それを参考として四部分類に配当していったが、東大の目録にない漢籍がしばしば現れた。

古書を集めた文庫などに共通する特徴として、和刻本漢籍を大量に所蔵する傾向があるが、東大の目録はこれをカバーしえないのである。そこで初めて内閣文庫の漢籍目録の存在を知らされた。これによって分類は飛躍的に進展したが、このことは身近な先達Y氏の助言によるのである。ただ目録上の書名と私のメモした書名が一致せず、同本か異本かの区別もままならないことがあったが、これが書名の取り方の無知によることも追々判明した。

長沢規矩也氏の図書学関係文献による独習が必然であった。これによって、書名のみならず寸法の計り方や、刊本・印本・修本の相違等、書誌学の基礎を並行して学んでいったのである。ただ刊記のない唐本などの出版時期の判定については、おおよそ雲をつかむようで全く手に余ったが、ここでもY氏の鑑識眼に多々助けられた。ただこのことは、「これは明代後期」とか「これは清初期」とかいわれてもその根拠がわからず、Y氏も経験によるとしかいいようのない、いわば書誌学の深奥に関わる問題であった。

かくして誤認や誤記だらけの目録が完成したが、同時にそこまで要求されていない元明版解題まで附録として作成したのは、もはや書誌学から足を抜き得ぬほどに、斯界にのめり込んでいたからであろう。その後、佐賀県内に多数散在する漢籍文庫を片端から整理し目録化することで、私の佐賀大学時代の大半は終わったといってよい。武雄の目録も平成二年改訂版を出させていただいたことで、一応責めは果たしたと思っている。

二松学舎大学における私に与えられた年数も徐々に減少している現在、鍋島関係の漢籍について、何らかの総括を目指す今日この頃である。



ブルガリアーセルビアの国境を越えて

国際政治経済学部
国際政治経済学学科 教授 菅原 淳子

2010年2月7日～14日まで、EU域内外におけるCross Border Cooperation(越境協力)の調査のため、他大学に勤める友人ら4人と共にチェコ、セルビア、ブルガリアを訪れた。チェコでは、プラハからウィーン発ベルリン行きのユーロシティに乗り、ドイツとの国境に近いウスティ・ナド・ラーベンを訪れ、当地の大学でヒアリングを行った。次にブルガリアに向かい、ソフィアから国際列車に乗って隣国セルビアに入り、セルビア第3の都市ニッシュで現地調査を行った。本稿ではソフィアーニッシュ間の列車の中で遭遇した出来事を紹介しよう。

2月11日朝、ソフィア駅で私たちが乗ったのはイスタンブルからウィーンに向かう国際列車である。わずか4両の編成で、それも「30年前の」と言っても良いような汚い車両だった。30年前と同様に一日2本しか走っておらず、当時西ドイツに向かうトルコ人でごった返していた列車は、今回閑散としていた。というのも今日のバルカンでは、鉄道よりバスによる移動が一般的なためである。さて、前日購入した指定券を持ってコンパートメント(車室)に入ると、すでにたくさんの荷物を抱えた二人の中年のブルガリア人女性が私たちの座席を占領していた。彼女たちの荷物の多くはビニール袋に入っており、どれも大きく膨らんでいる。セルビアにいる親戚を訪ねるところだろうと、私たちは勝手に想像していた。発車後に車掌が切符を調べに来ると、彼女たちは切符を持っていないのか、車掌にお金を渡している。この列車では指定券など意味がないようだ。

列車はソフィアから1時間もするとセルビアとの国境に到着した。セルビア側に入り、パスポート・コントロールの後で国境警察が荷物を調べに来たが、彼女たちのビニール袋は特に調べられることもなかった。さてこの後が見ものだった。国境警察が去ると、彼女たちは私たちの目の前で悠然とビニール袋の中身を、畳んでいた布製のスポーツバッグなどに移し替え始めたのだ。中古なのか新品なのかウールのズボン数本、かなりの枚数のシャツやセーターをビニール袋から取り出し、きれいに畳んで入れ替えている。極め付きは、座席の下にあった黒いビニール袋を取り出した時だった。私たちはゴミ袋だと思っていたが、ここにも大量の衣類。彼女たちは膨らんだスポーツバッグをカ

ートに乗せ国境の次の駅で降りて行った。翌日ニッシュの青空市場で、屋台に衣類を広げて売っている女性を見た時、私たちは彼女たちの仕事を確信したのだった。

2月12日午後、調査を終えてニッシュから再びソフィアへ向かった。ウィーン発イスタンブル行きで、日中は一日1本の、昨日同様の汚い列車である。指定されたコンパートメントは、すでに若い男女のグループに占領されていた。仕方なく隣に入ると、普段着のセルビア人男性が一人、ビニール袋に入っていた数10通の手紙を座席に広げ、何やらノートに書き写していた。順番に並べられた封筒には切手が貼られていない。列車がゆっくり動き出し、しばらくすると彼は突如一通の手紙をくるくる巻いてセロテープで止め、なんと、走っている列車の窓を開けて外に放ったのである。

何度かこうした行動を繰り返すのを見ていた私たちは、この男性が何か不法なことをしているのに違いないと思い始めていた。ところが停車した駅では、窓から駅員に手紙類を渡しているのである。この男性は何者なのか。ブルガリア語とチェコ語を使って、私たちはついに話しかけてみた。拙い会話の結果明らかになったのは、彼がニッシュ郵便局の鉄道部門で働いており、週3回この列車で国境までの沿線の村や町に郵便を届けているということ。通過駅では車窓から郵便物を投げ、停車駅では駅員に渡すという。収集することもあるという。これを聞いて納得したことは、国際列車なのにセルビア国内ではとんでもなくゆっくり走っていることと、やたらと汽笛を鳴らしていることだった。夜の列車でニッシュに帰ると言って、彼は数通の手紙と小包を持って国境の駅で降りた。彼を窓から見送りながら、同行していたS先生がつぶやいた。「ここは21世紀のヨーロッパなのかなあ。」



『小学館世界大地図』より

「かなし」いのは誰か。

文学部
国文学科 専任講師 五月女 肇志

「かなし」という古語は、多様な意味を持つことで知られる。「対象への真情が痛切にせまってはげしく心が揺さぶられるさまを広く表現する」（『日本国語大辞典』）語で、現在のように悲哀の意味だけでなく、愛しい、貧しいなどの意を持つことでも知られる。このことは、古典文学作品を解釈する際、語義を定めるのが難しくなることも少なくない。

例えば、院政期に女房歌人として活躍した^{いんぶもんいんたいふ}殷富門院大輔に次のような歌がある。

いまはとて衣を掛けし竹の葉にそよそよいかに^{ころも}かな
しかりけむ（『殷富門院大輔集』）

この歌に対する詳しい解説は、本年一月共著で上梓した『黄金の言葉』（勉誠社）でも記したが、法隆寺蔵の^{たまむしのすし}玉虫厨子にも描かれていて有名な、釈迦が飢えた虎の前に自分の体を投げ出し、食べられてしまい、その命を救った『最勝王経』の故事を踏まえた歌である。

歌の意味は次の通りである。これで最期だと思って釈迦が脱いだ自分の衣をかけた竹の葉が風でそよそよと揺れている。そうよ、どんなに「かなし」かただろうか。「そよ」が竹の葉が揺れる様子の擬態語と、代名詞「そ」に感嘆を表す終助詞「よ」が付いた「そうよ」という意味の言葉と掛詞になっている。

ここでの「かなし」の意味は、同じ作者が詠んだ次の二首から推測できよう。

つくづくと思ひとくこそかなしけれ^{みやま かり ひと}雪の深山の雁の一
^{こゑ}声

嬉しくも又かなしきは^{いにしへのり}古の法伝へける^{うまやど あと}厩戸の跡

一首目は、現在のヒマラヤで修行する釈迦の様子を、経典を通じて理解した時の感慨を詠んだ。もう一首は、作者が四天王寺へ参って厩戸皇子と呼ばれた聖徳太子の旧跡を訪ねての感銘を詠んでいる。

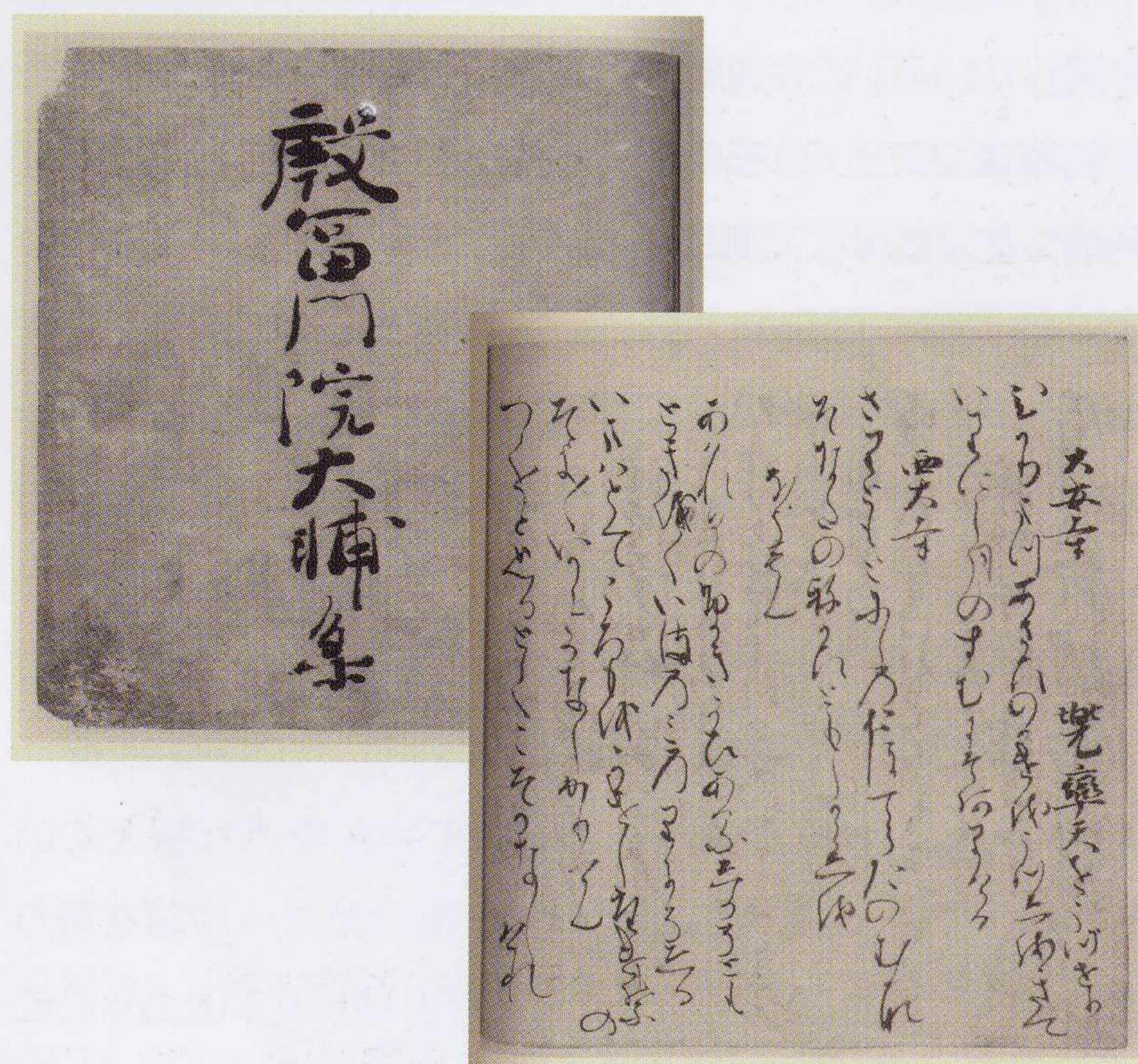
この作者の家集に見える以上の例から考えると、この歌も釈迦の自らの身を捨てた行為の尊さに対する賞賛の意を詠んでいると考えられよう。訳語としては、「有り難い」ということが妥当といえる。

しかし、この歌の基になった『最勝王経』では続けて、釈迦の両親、兄弟が自らの家族を失ったことに対し、激しく悲

嘆する様子を語っている。従って、この歌も竹の葉を目にした釈迦の家族達が、これで最期だと決意をしてそこに衣を掛けた釈迦の姿を想像し、嘆き悲しんだと解釈することも可能な一首となっている。「かなし」という言葉の多義性によって、曖昧さ、二重性を有している一首なのである。

このような解釈の揺れが生じることを、一語一語の言葉の意味を知悉し、大切に用いていた当時の歌人は気づかないわけがない。例えば、藤原定家は自ら撰んだ九番目の勅撰集『新勅撰和歌集』釈教歌の中の一首にこの歌を撰ぶにあたって、「いまはとて」という初句を「身を捨てて」というように改め、釈迦の身を捨てて虎の飢えを救うという行為が有り難く思うという意味を明確にしようとした。当然ながら作者殷富門院大輔自身も経典を読んだ上で、以上のような曖昧さを持つことになる可能性は理解していたと考えられる。それでもあえて「かなし」が両義にとれる一首を詠んだのは、彼女が尊い行為の背後にある血を分けた人達の悲哀を、看過できなかったのではないだろうか。それによってあえて行為に及んだ釈迦の行為を一層宗教的見地から有り難いものとするにもなるだろう。

三十一字という短詩形文学である和歌を読むと、動作や感情の主体が幾通りにも考えられることも少なくない。場合によっては、そこに読者の戸惑いも計算に入れた作者による戦略も窺われ、大変興味深く思われるのである。



『冷泉家時雨亭叢書 中世私家集二』（朝日新聞社）より

外国人としての私が出会った日本文学

名誉教授 呉 英元

2010年は国民読書の年。読書は空気を吸うように、ご飯を食べるように自然に身につくもので、その人の置かれている時代や環境によってさまざまな形で現れるものである。

私は、韓国の最も封建的、かつ儒教精神の厳しい家柄の五人兄弟の末娘として生まれた。代々漢文を教える家であったが、男の子は4,5歳から「千字文」を習い、子供の教養書「明心寶鑑」を終われば「論語」まで学ぶといったところで、女の子は、奥の部屋で母からハングル文字を学び、嫁入り修業を身につけるのであった。幼い頃は母が読んでくれる宮中小説や歴史小説、偉人伝などを聞いては涙ぐんだり笑ったりしながら育っていった。

女性は学校へは行かせない頑固な思想の下、日本留学を終えて帰国し、海軍将校となった二番目の兄の積極的な協力により中学校へ進学したものの、朝鮮戦争突発、家族揃って海軍基地である南の端「鎮海」^{チンヘ}に余儀なく疎開させられた。激しい戦争の最中、夜は押入れに隠れ、蠟燭をともし、アンネ・フランクが第二次世界大戦中、アムステルダム^{アムステルダム}の隠れ家をつづった『アンネの日記』を読みながら、明日をも知らない自分に重ねてはとめどなく涙を流した。

鎮海女子高校は、ソウルから疎開してきた各学校の学生によって寄せ集まって複合高校のようになり、先生の中には元の職場を失った大学の教授も何人かいて、カリキュラムも大幅に変わり、戦時でありながらも充実した授業が行なわれた。国語は当時名の知られた小説家から習った。毎日の授業で紹介された名作を読み続けた。フランス作家モーパッサンの『女の一生』、アメリカ小説家オー・ヘンリーの短編『最後の一葉』、ロシア作家レフ・トルストイの『復活』、ドストエフスキーの『罪と罰』と『カラマーゾフの兄弟』など感銘深く吸収していった。

奈良女子高等師範学校を出たソウル大学出身の先生からは哲学や英文学を学び、アリストテレス、プラトン、ソクラテス、カントといった哲学者の難しい論理を仕込まれ、シェークスピアの『ハムレット』を原文で覚えさせられたり、ゲーテの『ファウスト』を読んでレポートを書かせられたりした。日本の作家では夏目漱石のことをよく口にし、『草枕』の冒頭の「智に働けば角が立つ 情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とにかく人の世は住みにくい。」と口ずさんだ。私の日本文学への出会いはこれが全てだった。

大学では専攻の韓国文学に没頭した。韓国文学といえば当時は、大きく古典文学と現代文学の二分野に分かれていて教育学部は古典文学も現代文学も語学も総括的にやらなけれ

ばならず、教育現場において何を担当されても全うするように訓練されるのであった。卒業後、文教部から指名された学校に勤めながら、詩やエッセイの発表などを含めて常に文学作品との接触は絶えなかった。

最初日本留学を決めた時、韓国の学部と大学院では古典の短歌「時調」と「詩文学」を論文テーマにしていたので、日本では「日韓比較詩文学」研究を考えていた。が、日本の大学院で講義を受けながら日本文学に接しているうち、夏目漱石の『こころ』に出会ったのである。

韓国の近現代文学史は、日本のそれと比べてかなり内容と質を異にしている。近代における歴史的社会的変遷により複雑多岐にわたる様相を持っている。古典文学から現代文学へと発展していく過程においても、ハングルによる言文一致の新体形成は、日本による植民地化における言語弾圧を受けることになり、その後、戦後ようやく世界文明を受け入れながら封建社会から現代社会へと啓蒙的運動が文学のベースになっているのに比べて、私が出会った日本近代文学は驚くほど先駆的であった。

『こころ』は、哲学的、心理学的で私の胸を刺し、ある意味での奥深いところから新しく目を覚ましてくれた感動的なものであった。まさに「自己の心を捕えんと欲する人々に、人間の心を捕えたるこの作物をすすむ」の漱石の言葉は、私に向かってささやいているようであった。

つづいて後期三部作を立て続けに読み進め、再三驚いた。『彼岸過迄』の須永が苦しんでいた自己意識も、『行人』の一郎が考えて考え切れなかった悩みも、『こころ』の先生が許されなかった罪の痛みも、みんな根を一つにした問題意識によって同一人物が段階的に変遷し、物語を成した人間像が私の前に現れたのである。

1910年の日韓併合により、日本の植民地政策における民族の弾圧、1919年の3・1民族独立運動、後に民族の言葉を失い作品創作どころではなかった時代がつづく。この時代、「朝鮮民族」のために必死に働きかけた柳宗悦のような日本人もいれば、静かに筆を持って、人間の奥深いところにとぐるを巻いていた所有意識の極悪のエゴイズムを裁きにだしては叫ぶ夏目漱石がいたのであった。

文学って素晴らしいものである。人を泣かせたり、希望を持たせたり、悟らせたり、これは本を読む人だけが味わえるものである。

名誉教授 久保田 美年子

中国現代文学の経緯を語るとき、1966年から1976年までの十年間展開された、文化大革命を抜きにして語ることはできないと思う。

作家巴金は最も成熟し、円熟した62歳から72歳までの十年間を、文革開始当時から四人組によって想像を絶する迫害を受け、当時の時代のうねりに翻弄され、空費を余儀なくされた。その無念さは計り知れないものだと思う。しかし、彼はこの失われた時間を取りもどす決心をし、『随想録』『探索集』『真話集』を書き上げた。

ある時期には、私も誠心誠意、自分を「新しく生まれ変わらせ、真人間にならせ」ようとし、自分の意思を持たないロボットに改造しようとしたことがある。自分が「牛小屋」の中において、まぎれもないロボットの役をつとめ、しかも恥ずかしげもなく、せつせと、ロボットの振りをしていた。後に、こんなことは、大ペテン劇だと気づいて絶望した。

巴金は「新しく生まれ変わる」術を演じたいと思うほどの、愚かさだったと自身を省みているが、こうした努力(偽善の)が必要とされ、生きるには、それがたとえ愚作な芝居であったとしても、演じなければ生きる術がなかったであろう。

私がすがりついていた唯一の「ワラ」とは、すなわち「改造」ということだった。そして、真剣に自分を改造しようと決心した。(中略)このため私は歯をくいしばって、とことんまで頑張り抜く決心をした。私は「四人組」の統治下で一切の苦痛を耐え忍び、つまずき転んだところで這い上がろうと妄想した。

巴金は1966年後半から三年間、右(傾)の教育で「改造」を受けていた。四人組の教育による思想改造を決心したことを意味している。

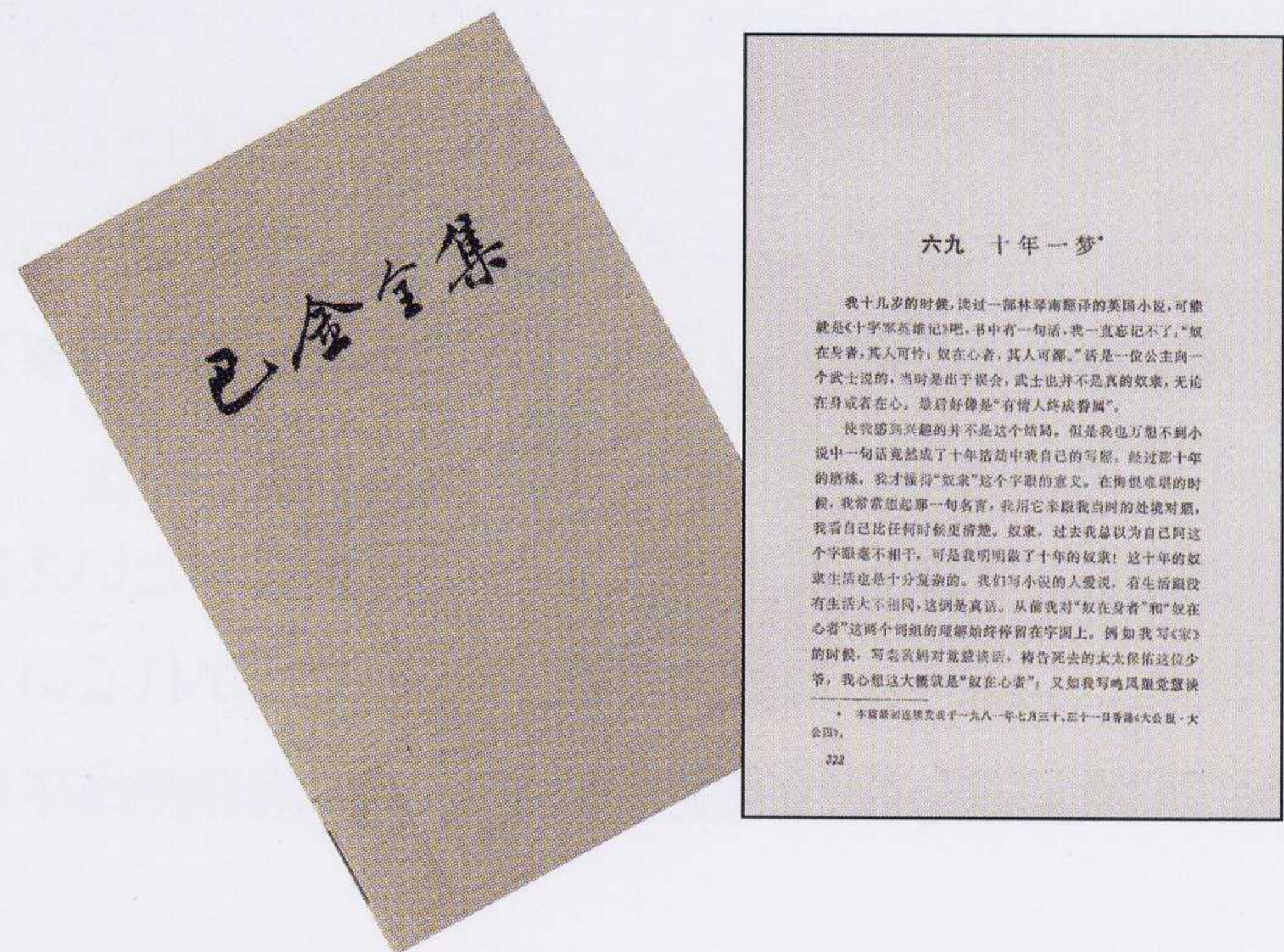
「奴は身につくと、その人は哀れなもの。奴は心にいると、その人は卑しくなる」この言葉は「十年の大災害」中の私の姿だとは思ひもしなかった。あの十年間のしごきを終えて、私は「奴隷」という意味がやっとわかったような気がした。奴隷という言葉は以前の私には何の関係もない文字であったが、

私が十年間、奴隷になったのは真実であった!「十年一夢」

彼は精神的奴隷に等しい状態になっていた。この「奴隷の哲学」が自分の身体をきつく縛っているように感じ、彼自身を制御し得なくなってしまったのである。巴金はなぜ四人組が「知識」を憎むかという謎がとけたのである。つまり、「知識」が知識人らの窮地に対処する「武器」になることを恐れていたのである。相手の「知識」という「武器」を完全に奪い取りたいというのが、彼らの目的だったのである。

十年の間に私は段々と、周囲の一切がみなうそであると、ハッキリ見えてきたのだ!私の頭脳ははっきりし、後を振り返ってみると、この長い年月、自分がどのように歩んできたのか、見当が付けられた。わが足許に踏みつけているのは、なんと沢山のうそ、みずみずしい花で飾られたうそではないか!うそが真理に変わるはずがない。こんな平易な道理なのに、私は、これを理解するまでにきわめて長い時間をかけ、非常に高い代価を払った。

巴金の散文『真話集』の誕生は、ある意味で中国現代文学史に、新しい表現形式と新たな文学精神を示したと言えよう。巴金は、まさにその先駆者なのである。この散文が中国のすべての読者に驚きの感動と精神の高揚を与えたのである。散文『真話集』は十年の大災害のとき、巴金が生涯で最も無惨な辱めを受け、その結果、皮肉にも彼が最も大切に思う「人間としての品格」の喪失を経験したのであった。しかし、この書は、巴金の魂の遍歴であり、自己を審判した記録である、新たな時代の文学のあり方を示した、散文の最高傑作といえるのではないだろうか。



『水滸伝』を読んでみませんか

図書館嘱託職員 阿部 晋一郎

中国では明代になると、宋代に盛り場で語られてきた物語が読み物の形に整理されます。そして、出版業の隆盛もあり小説となって刊行され、流行していきます。小説には文言(書き言葉)で書かれたものと白話(話し言葉)で書かれたものがあります。後者において、ストーリーもさることながら、とりわけ文章が最もすばらしいとされているのが『水滸伝』です。私は高校生の時にこの小説と出会い、魯智深、林冲、武松といった登場人物(『水滸伝』の世界では「好漢」と呼びます)の活躍に魅せられ、夢中になって繰り返し読みました。

『水滸伝』は、宋の時代に宋江という人物が起こした反乱に関する史実や伝説、戯曲などが一つの小説としてまとめられたものです。さまざまな経緯を経て計108人の好漢たちが梁山泊に集まり、のち朝廷の招きに応じて官軍となり、外国との戦争、反乱討伐を行い、多くの仲間を失っていくという、最後は悲劇で幕を閉じる物語です。

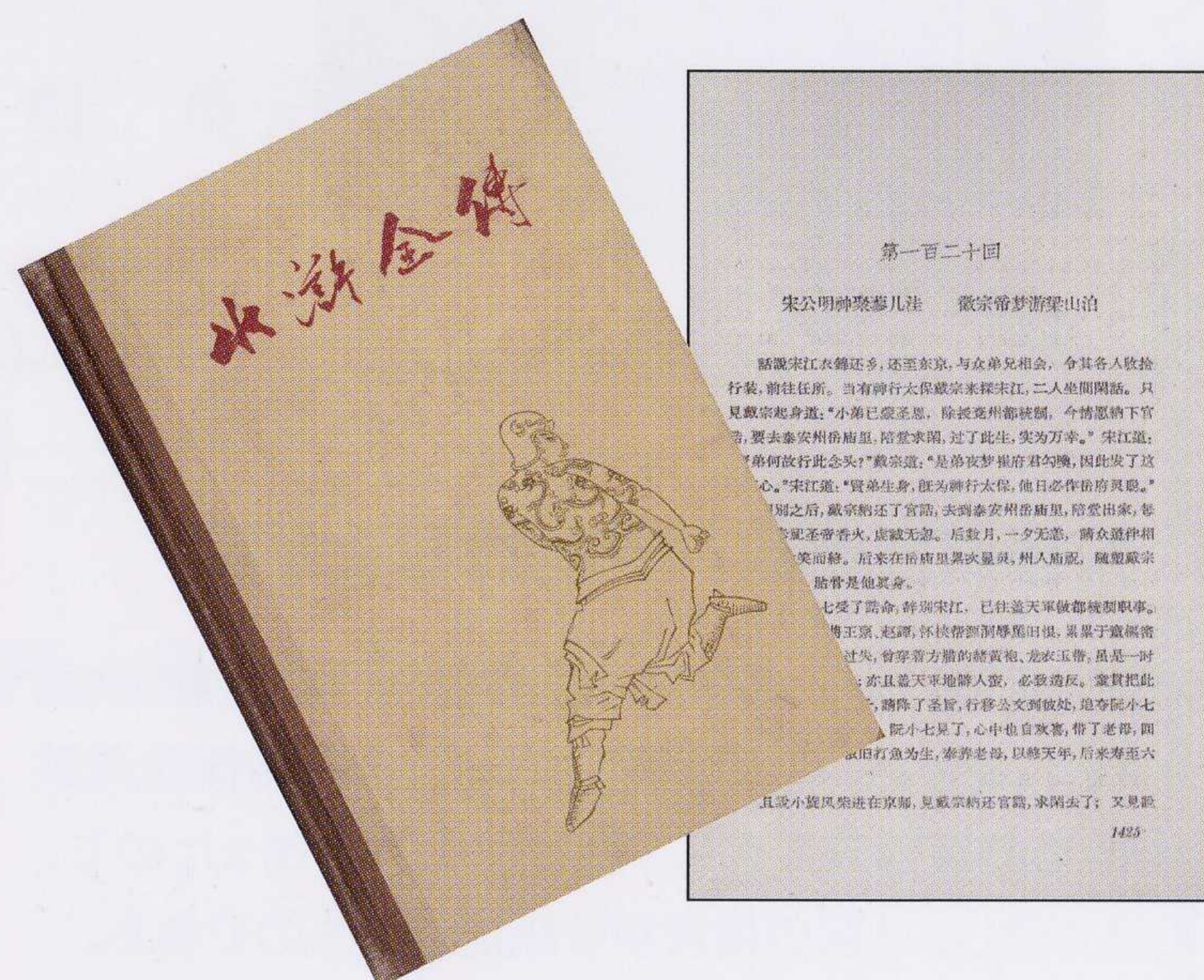
今述べた内容は、百回本(ここでいう「回」とは、物語の一区切りのこと)と呼ばれる「文繁本」のテキストのものです。「文繁本」とは、物語の叙述が詳しいテキストです。まずこのテキストが成立し、後に叙述を簡略にし、各頁の上に絵が描かれている「文簡本」のものができたといわれています。ここでは、現在流行している「文繁本」について見ていきます。「文繁本」は百回本がまず初めに成立し、後に百二十回本や七十回本ができたと考えられています。百二十回本は、百回本の反乱討伐のまえに、さらに別の反乱討伐を二つ加えたもので、加えられた部分以外はほぼ百回本と同じです。七十回本は明末清初の金聖嘆という人物が、好漢が梁山泊に集結するところで話を切ってしまう、さらに注を施したり、詩詞を削るなどの手を加えているものです。中国では七十回本が刊行されてからはこのテキストのみが流行しました。その理由はいくつかありますが、分量が減ることで本屋も出版しやすくなり、読者も買いやすくなるという商業的な理由もあるようです。

上記のようにいくつかある『水滸伝』のテキストのいずれを読むにしても、一番良いと思う読み方は中国語の原文を読むという方法です。なぜなら『水滸伝』は、前述したようにその文章が最もすばらしい小説であるからです。

しかし、中国語の原文を読めといわれてもそう簡単なことではないでしょう。幸い『水滸伝』には翻訳があります。百回本の翻訳ならば、吉川幸次郎・清水茂訳のもの(岩波書店、文庫版もあり)が、百二十回本なら駒田信二訳のもの(平凡社中国古典文学大系所収、また講談社文庫、現在はちくま文庫版)があります。七十回本なら、村上知行訳のもの(現代教養文庫)や佐藤一郎訳(集英社、世界文学全集所収)があるそうです。

以上のように翻訳本が存在します。私個人としては、物語を途中で切ってしまった七十回本は好みません。でも百回とか百二十回とかいう長さは辛いなあと思っているあなたへ朗報があります。それは、百二十回本を適宜省略し、六十四節にわけてある松枝茂夫編訳『水滸伝』(岩波少年文庫)があることです。中国文学研究者の高島俊男氏は、その著書『水滸伝と日本人』(大修館書店、のちちくま文庫)において、「『水滸伝』というのは有名な小説であるから一度は読んでみたい。(中略)主要なところは全部キチンとあって、もちろん結末まであって、立派な日本語で書かれていて、十分に読みごたえのある訳本で読みたい」読者にこの本をすすめています。夢中になって百二十回本を一気に読んでしまった私は、この本に目を向けることがありませんでした。どのように適宜省略されているのか、是非一度この『水滸伝』も読んでみたいと思います。

『水滸伝』には、このようにいくつかの種類、読み方があります。まだ『水滸伝』を読んだことがないというあなた、一度この小説を読み、その文章のすばらしさに触れてみませんか。



開館日 案内

3月の開館日案内

九段				柏	
9:00 ~ 16:20	1	月		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	2	火		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	3	水		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	4	木		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	5	金		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	6	土		閉館	
閉館	7	日		閉館	
9:00 ~ 16:20	8	月		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	9	火		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	10	水		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	11	木		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	12	金		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	13	土		閉館	
閉館	14	日		閉館	
9:00 ~ 16:20	15	月		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	16	火		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	17	水		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	18	木		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	19	金		9:15 ~ 16:00	
9:00 ~ 16:20	20	土		閉館	
閉館	21	日		閉館	
閉館(振替休日)	22	月		閉館(振替休日)	
9:00 ~ 16:20	23	火		9:15 ~ 16:00	
☆ 9:00 ~ 16:20	24	水		9:15 ~ 16:00	☆
閉館(年度末作業のため)	25	木		閉館(年度末作業のため)	
"	26	金		"	
"	27	土		"	
"	28	日		"	
"	29	月		"	
"	30	火		"	
"	31	水		"	

☆24日(火)は、卒業・修了年次生および図書館利用証明の有効期限が2010年3月までとなっている方の長期貸出の返却期限です。
 なお、在学生・教職員の長期貸出の返却期限は、4月19日(月)です。

開館時間 案内

	平日(授業期)	平日(休業期)
九段	9:00~21:50	9:00~16:20
柏	9:15~18:55	9:15~16:00

	土曜日(授業期)	土曜日(休業期)
九段	9:00~16:50	9:00~16:20
柏	9:15~16:00	9:15~16:00

※ 開館時間等が変更になる場合は、随時、図書館ホームページ、掲示等でお知らせします。

休館日

- ◇日曜日・国民の休日・祝日
- ◇創立記念日(10月10日)
- ◇年末年始・夏期休業中・学年末休業中の一定期間

企画展

次の日程で、大学資料展示室において企画展が開催されています。

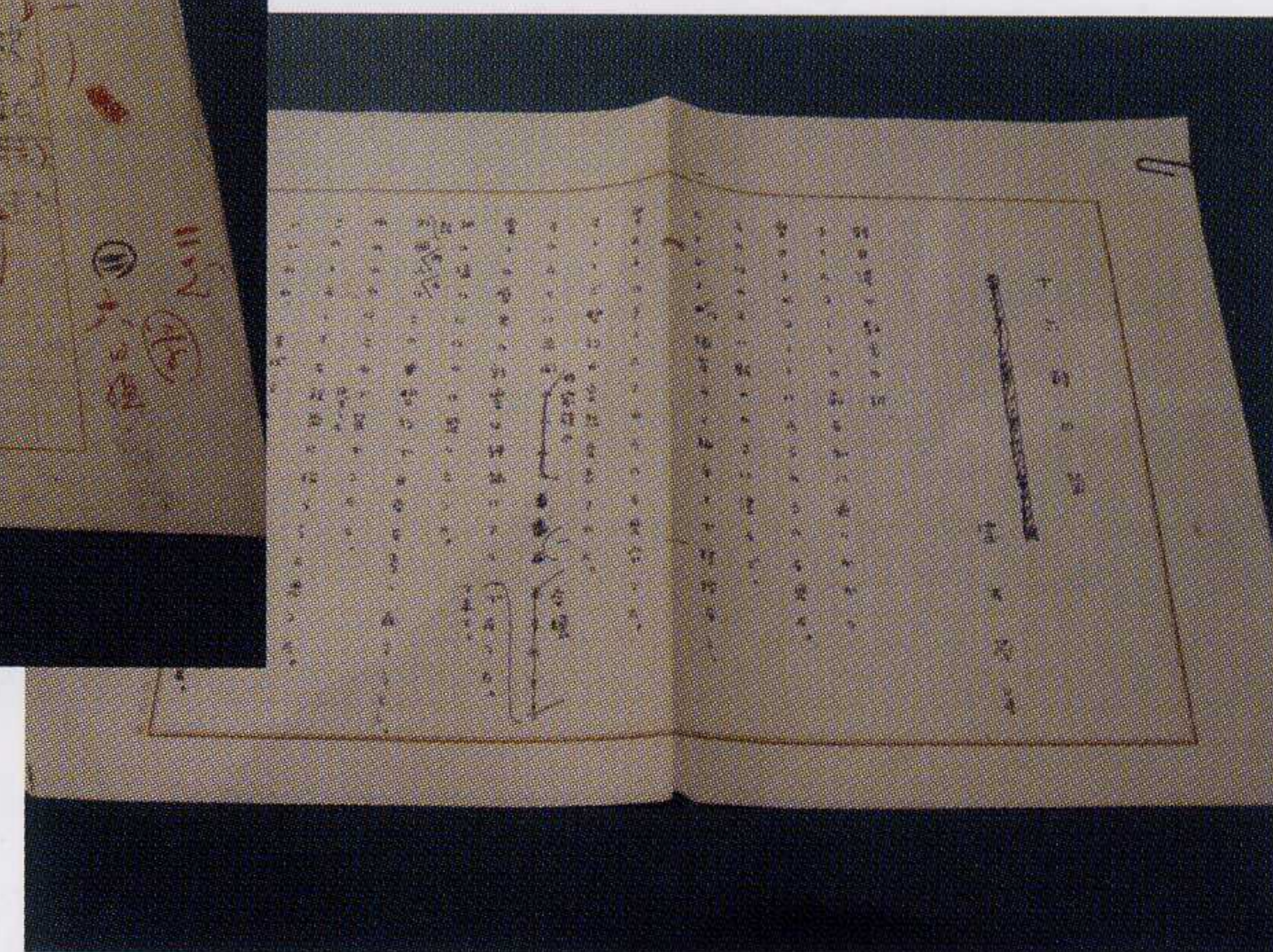
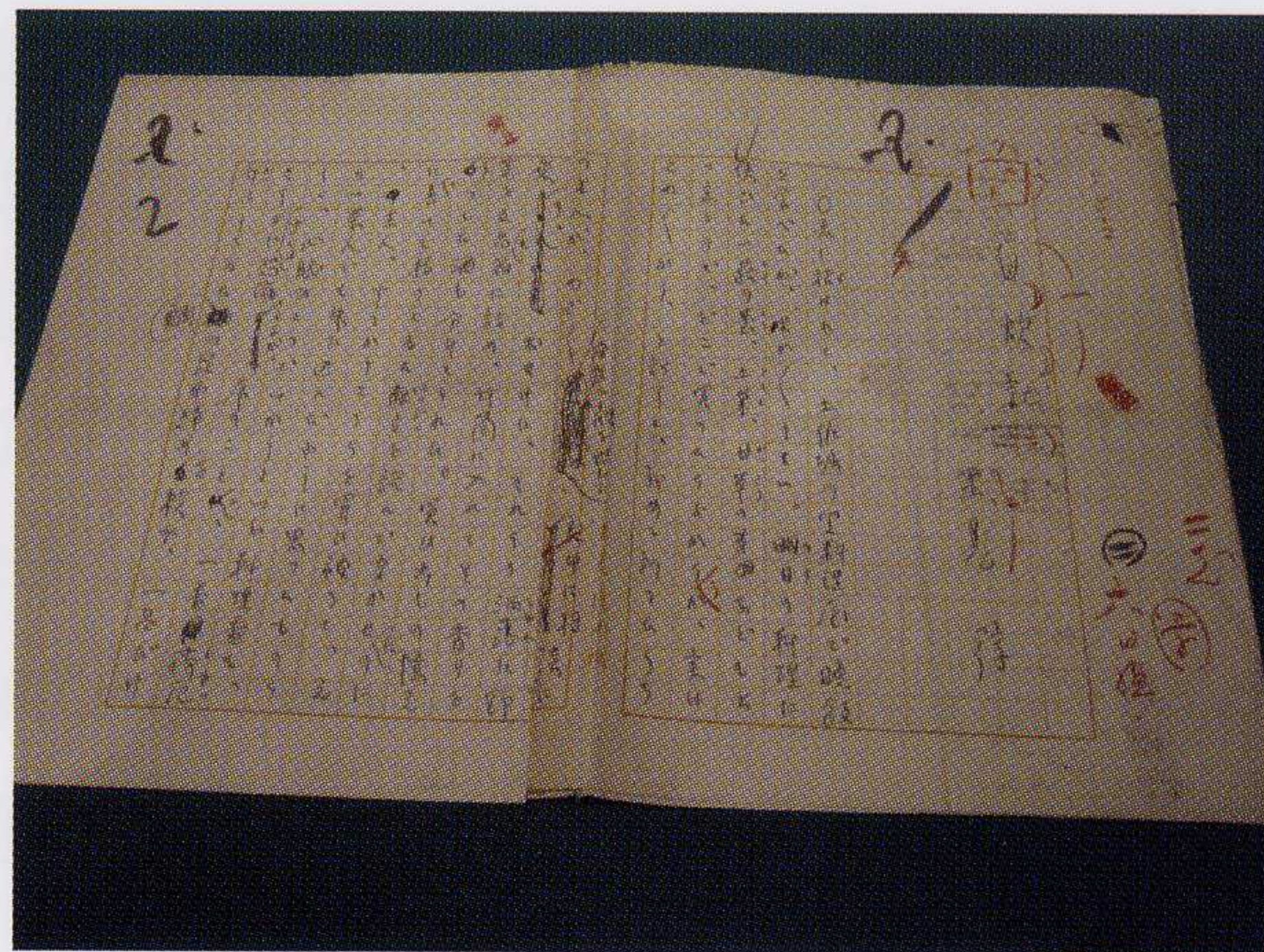
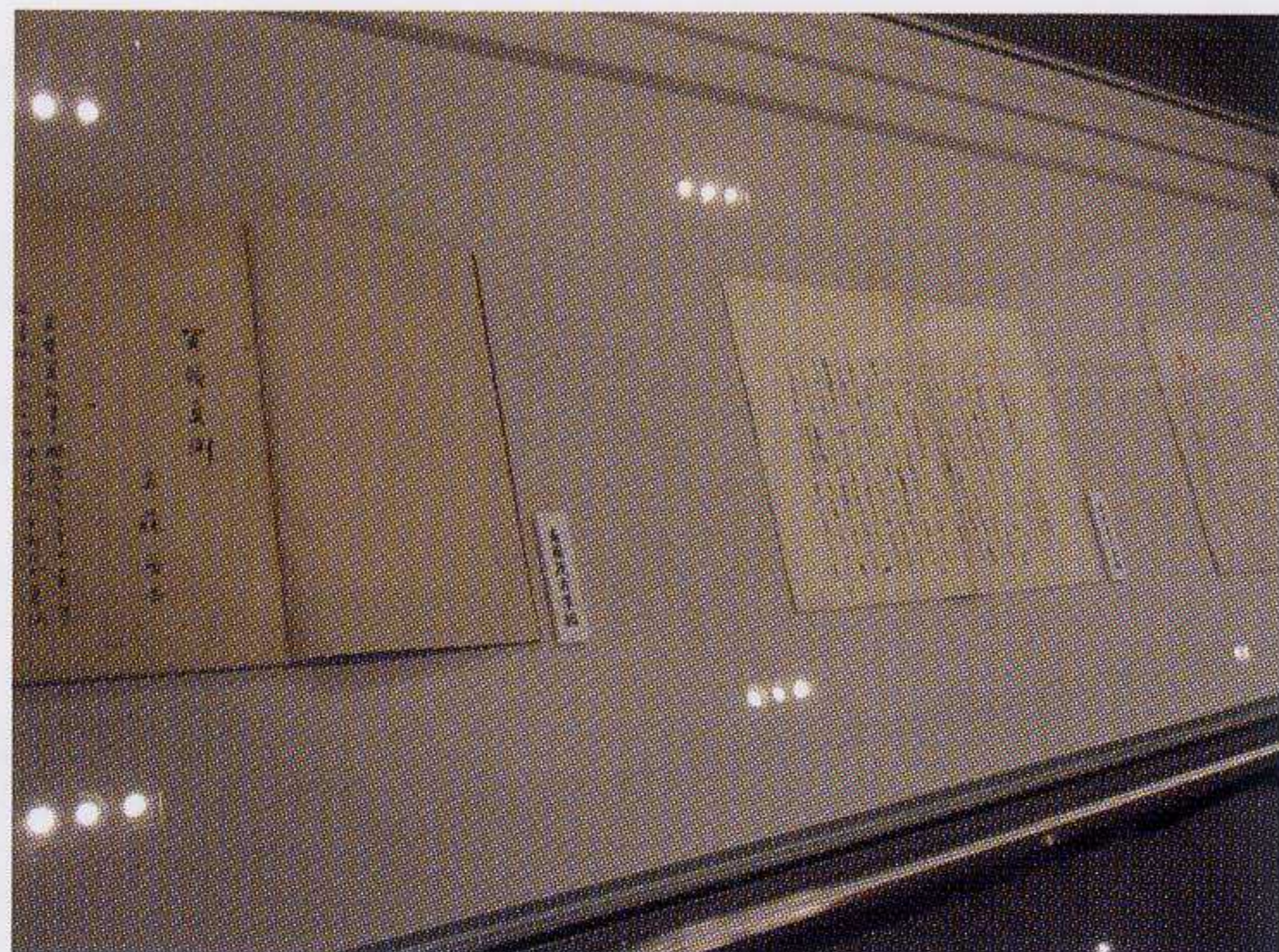
●3・4月企画展「作家達の筆跡」

期間：3月15日(月)～4月17日(土)

時間：10時～16時

閉館：日曜・祝日

但し、3月28日(日)は開館します。



表紙資料解説

斎藤茂吉原稿「賀茂真淵」と葉書

『斎藤茂吉全集』所収。昭和8年春陽堂発行の「萬葉集講座」第4巻に載った。この原稿に関して、当時春陽堂萬葉集講座担当の岸哲夫氏宛に「原稿が出来上がったので、取りに来て欲しい」旨の葉書が表紙掲載のものである。

二松学舎大学附属図書館

季報

第76号

発行日 平成22(2010)年3月15日

発行 二松学舎大学附属図書館

九段校舎図書館 〒102-8336 東京都千代田区三番町6-16

電話:03-3263-6364

柏校舎図書館 〒277-8585 千葉県柏市大井2590

電話:04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ

電話:03-5614-2515